

燃える日

秋次もへ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

起伏がなくて、楽しい日常。

目次

雨宿りの不在Ⅰ	1
雨宿りの不在Ⅱ	12
不思議の城	25
夏風邪は性質が悪い？	40
燃える日	48

雨宿りの不在Ⅰ

今日は朝こそ晴れていたものの、何時間目からか雨が降り始め、今も小雨が降り続けている。空はどんよりとして、雨粒が生徒昇降口の軒を叩く。いくら今日が金曜で明日が休みでも、これだと帰りが億劫で仕方がなかった。

それでも帰らないといけないから、僕が立ち止まっている間にも、名前や顔を知らない生徒達は傘を差したり駐輪場に走ったりして着々と帰宅に近づいている。それに習って、僕は駐輪場に走ればいいんだけど、どうにも。

雨は嫌いだ。合羽を着るのが面倒だし暑いし不格好だから。女子はそのへん妥協が早いと言うか、物分りがいいけれど、僕みたいな男子はそうもいかない。多少の雨なら濡れないことより、濡れること以外の快適さを選ぶ。

でも、まあ、梅雨だ。慣れるか濡れるしかない。僕は後者を選んだ。

最初こそ気にしなければ風邪をひくこともないだろうし、どうにでもなりそうな雨だったが、校門から出て少し行く頃には雨足が強まってきた。

合羽の呪縛からは逃れられないようだ。あれはどこまででも追ってくる。退き際を見誤らないようにしなければ。

どこか軒下に入って、呪いにこの身を浸そうかと考えていたら、そこに彼女は立っていた。この雨の中、傘も差さずに、だ。

多くの生徒が通学路としている道から逸れたこの脇道の、雨を遮るものの無い道路の脇に。

誰かや何かを待っているんだろうか。でも、それなら軒下でも雨宿りするだろう。

じゃあ、どうしてあの子は帰る素振りも見せずにあんなところに立ち尽くしてるんだ？

遠目で見ても、僕と同じ学校の女子制服は雨に濡れ、透けて肌に張り付き、灰色のスカートも水を吸って重たそうな色をしている。なのに、彼女はそれに構わず僕のいるほうを——僕の来た道のほうを見ていて——目が合った。

この子は普通じゃない。それがずっとそうなのかは分からないけど、今だけは確かに言える。背中に冷気が走った。少し、怖かった。

けれど、僕が自転車漕いでいる限りその距離は縮まっていく。彼女はその間も僕を見ていた。気のせいではないらしかった。

近づくにつれ、次第に彼女の細部が見えてくる。腰まである黒髪は濡れて額に、頬に見苦しくない程度に張り付き、豊富なまつ毛に縁取られた宝石みたいな目が僕を見ていた。雨で体温が下がって、色白の頬に赤みが差している。小さな口が、何かを言おうと

して戦慄く。

僕は魔が差して、見過ごして通り過ぎることを忘れた。どころか、通り過ぎる寸前、自転車を停めさせした。

そして僕は言葉を待つ。

もしこれが大いなる勘違いなら、「これ、使ってください」とか何とか言つて合羽を置いて逃げ去るだけだ。その場合、変なやつなのは僕だけだ。

彼女の唇の震えは止まる。

「ボクと、一緒に暮らしませんか？」

……………は？

どうやら僕は変なやつにならなくていいみたいだ。この子、言動すべてが普通じゃない。

僕が返事に窮している間も雨は降り続けて、彼女も僕も為す術もなく雨に打たれる。沈黙をかき消してくれるのは助かるけれど、雲行きはどんどん怪しくなつて、横殴りに僕達を苛む。

彼女はまだ僕を見ている。気のせいと言うには無理がある。立ち止まったなら、ここから無視はできない。責任がある。責任はとらないといけない。

彼女の前髪から滴る雫を見ながら僕は答えを急いだ。なんだかよく分からないが、風

邪をひかせないよう努める責任もある気がした。

「どういう冗談か知らないけどさ、付き合うから場所を変えよう。風邪ひくから」

家帰るのも面倒だし。答えとしてはこんなところか。

「じゃあボクの家きて。この近くだから、それでいい?」

「ああ、いいよ」

考える素振りも見せずには彼女が言うので、何も考えずに返事をする。手短にすませられるなら、それでいい。

僕は自転車の前カゴに手を伸ばして積んであった合羽を手に取り、彼女に渡す。「なに?」と訊くので、「着たら?」と言ってみる。

「家近くなんだけど、」って言いながらも一応といった感じで彼女は合羽を着いた。これで風邪のほうの責任は果たした。それで。

「それで、家までどうする。君がこれに乗って、僕が走ろうか?」

「ん? こうする」

言つて、自転車の後ろに乗ってくる。二人乗りだ。合羽の両腕が後ろから僕に回される。

「どこを曲がるとかは言うから、心配しないで」

「分かった」

確かに家は近く、何分かつたとかは知らないけど、そのまま真つ直ぐ走つて途中右に一度曲がっただけでその道の左手に家があった。家と言うか、マンションが。

駐輪場に自転車を停めて、マンションのエントランスに急ぐ。彼女が暗証番号を打ち込んで、開いた玄関に踏み込む。二人でエレベーターに乗り込んだら、浮遊感に包まれる。この間会話は無い。

5Fのランプが点灯して、扉が開く。降りて行く彼女の後を追う。その後ろ姿を見て、女の子にしては背が高めだななんてどうでもいいことを考える。

503のプレートが付いた黒いドアの前で彼女は止まる。鍵をあけてるから、ここが彼女の家なんだろう。

「お邪魔します」とか言いながら続いて部屋に入る。玄関からすぐにキッチンが見える。右手にバスルームがあつて、奥に部屋が見えた。

奥の部屋が彼女の部屋みたいだ。中に入ってきてみると、部屋はここだけだった。

フローリング。ミントグリーンのカーテン、白いラグに背の低い茶色のスクエアテーブルと白いソファ、赤いクッションその他クッション。テレビ。ローズピンクを基調にしたベッド、本棚……都会を珍しがる田舎者かつてくらい見過ぎだ。

彼女はそのまま歩いて行って、テーブルの窓側のほうに座る。促されて、僕もその対面に座った。

「それでね、話の続き。ボクと一緒に暮らさなかつて話なんだけど」

「それもだけど、まず名前を教えてもらわないと色々やりにくい」

今のままでは不明度が高過ぎる。分かつてることなんて、同じ学校に通つてることだけじゃないか。

「ボク？　ボクはね、沖野早希だよ。ボクつて言うけど、体は女の子だから安心して。後はそう、君と同じ学校の二年生。君は？」

害意は感じない。何か引っかけりを感じる言い回しがあつたような気がしないでもないが、今はいい。

「御春奏。僕も二年だから、気は遣わなくて良さそうだな」

自己紹介……素性紹介を交わして、少しは状況が改善した。改善した気にはなれた。

「みはる、そう。どっちも名前みたい。ボクはミハルつて呼ぼうかな、名前で呼んでるつもりでね。ああ、ボクのことには好きに呼んでくれていいよ。沖野でも沖野さんでも早希でも。ああやっぱり、沖野と沖野さんはだめ。名前で呼んでね」

楽しそうに、気ままに喋る。沖野の本質はこうなんだろうか。

「早希ちゃんそのままだと風邪ひくから風呂入るとかしたほうが良くない？　雨に濡れても、風呂入って体温めたりはしない人？」

沖野が禁止されたので、せめてもの抵抗でちゃんを付けてみたけど。これはこれでど

うなのか。そんな思いを振り切るのと、あと心配からそんなことを訊いた。

「入る人。話が終わってからにしようと思つて。話が終わつて、ミハルと暮らすのが決まってから悠々とお風呂に入ろうと思つて」

「暮らすのは分らないけど、泊まるくらいなら考える。僕は逃げないし、先に入つてきたら？」

目のやり場に困らないこともないし。濡れたら透けるんだよ、そういうのあまり良くない。

「ふうん。じゃあシャワーにする。そんなに待たせないから逃げないでよね、ミハル？」

「逃げないって」

「そうだ、ミハルも浴びる？ シャワー。濡れて風邪ひくのはミハルも同じでしょ」

「僕はいいいよ、入らないし浴びない人だから。気にしない」

「そっか。そうなんだ」

沖野は僕に背を向けて、ウォークインクローゼットの中から着替えを取り出して、背を向けてるから分からなくても、何となく目をそらす。

「ちよつと待つてて」

そうして、着替えを抱えた沖野が僕を通り過ぎてバスルームに移った。と思つたら戻つてきた。

「はい、タオル」

「ん、ありがとう」

沖野は今度こそバスルームに行く。その姿を見送って、無意識でタオルのにおいを嗅いでみる。違う家のタオルのにおいがする。ここまで思っ、何してんだ自分と思いがら髪を拭き始めた。

雨はやんだようで、代わりにシャワーの音がする。沖野がシャワーを浴びている。髪を拭き終わったら何もすることはなくて、後はただ沖野の帰りを待つ。帰りはしない。もう雨はやんだけど、そこまで家に帰りたいわけでもなく。

さつきテレビ点けたら良かったかなあ、とぼーつとしていたらいつの間にか時間は経って、沖野が戻ってきた。

女の子のシャンプーのにおい。雨のときだからかそれ余計に感じる。

沖野は着替えて、白のTシャツと薄青色のデニムで膝上のキュロットになっている。ほんのり肌が上気していて、ドライヤーでその長い髪を乾かしている。ドライヤーがうるさいので、乾かし終わるまで話の続きはできない。待ち時間はまだ続くということだ。

それでも無音よりは幾分ましなのか、ドライヤーのスイッチが切られたとき僕は案外早かったなと思った。

「タオル」

「はい」

水を吸ったタオルは沖野の手によって洗濯機に持って行かれた。

「泊まるくらいなら考えてくれるんだっけ？ 意外とすんなり受け入れたね」

早々に話が再開される。

「え、ほんとに泊まらせるつもりなのか？ 暮らすのもだけけど、嘘だろ」

「どういう意図がある嘘かは全くもって分からないけれど。それに何だ、警戒心がないんだらうか。」

「嘘吐かないよ。暮らすって言ったのから泊まるのまで全部本当。ボクは本気だよ。ミハルは本気じゃなかったんだ」

「どうして？」

「……何が？」

「どうして僕と暮らしたいのかってこと。何か理由があるのか？」

「特別なことじゃないよ。通りがかったのがミハルだったってだけ。特別だって言ってる欲しかった？」

「ますます分からなくなる。だけれど、沖野は言葉のとおりには、嘘を吐いてないんだらう。思ったそのままを言う。そんな風に見える。」

「だったら、誰かと暮らしたくなった理由は？ それならあるんじゃない？」

「ないよ。したいって思ったから、したいんだよ。それじゃだめ？ そんな理由じゃミハルは泊まらない？」

「そんなことも、ないけどさ」

「ないのか。まあ、確かに無いは無いです。ここからなら学校も近いし……月曜の話をするのは気が早いけど。」

「ならいいじゃん。ミハルはボクの家泊まるの。これで決まり」

「なんだか嬉しそうに沖野は笑っている。僕も笑えばいいのか？」

「早希ちゃんは、危ないことしてると思わないの？ 僕から見た早希ちゃんもそうだけど、早希ちゃんから見た僕も他人なのに」

「危なくない。ボクそういうの分かるし、勘がね。女の勘が。女の子らしくね」

「……危ないだろ。世の中には何か考えてるやつと、何も考えてないやつしかいないんだからさ」

「でもね、もうボクはミハルが泊まることしか考えられない」

「そういう難しいことは考えられない、と強情に念押ししてくる。そもそも、唐突に「一緒に暮らしませんか？」と言うような人間だ、説得するのは難しいはずだった。」

結局、なるようになるしかないのだ。僕に危険があるわけなし。恐らくは。

「分かったよ、一晚寝る場所が変わるだけだ。そこまで言うなら、泊まってもいい」
「言ったね。約束は守ってよね。信じてるんだから」

流されるままに泊まることが確定して、守るべきものが僕にはできた。話は次々に転がっていく。

「それじゃあ、お泊りが決まったところで次に決めることがあります。それは今日何を食べるか、です」

「何食べたい？」と重ねて訊くからには、僕が食べたいものを作ってくれるんだろう。沖野はじい、とこちらをみている。

「そうだな、オムライス」

「よし決まりね。美味しいの作ってあげる。材料買ってこなきゃね」

料理に関する知識の無さを披露したようなものだが、沖野は嫌な顔一つしない。手間のかかるものや外食と言わなかっただけ僕なりの及第点だ。

「僕も行くよ。寝るときの服も買わないと無いしな。荷物持ちもするし」

「うん、一緒に行こう。二人だと、行きと帰りに退屈しないね」

雨宿りの不在Ⅱ

雨は止んでいて、僕は傘を持たずに家を出た。空は曇ってるし、水たまりもあるけれど、無駄に備えることもない。家の前の道をさつきと逆方向に歩いていく。でも気になることがあった。些細な会話の種だけ。

「どうして白のスニーカーを？」

このさつきまで雨が降っていて、これから降ることも否めない状況で沖野は汚れやすい白を選んできたのだ。

「ボクが履きたいと思ったから」

「そう、分かった」

雨では沖野を左右できない。そういうことらしく、そういう性格らしかった。

まずスーパーまでの途上にある服屋で僕の着替えを適当に見繕い、そこからまたスーパーを目指す。

歩きながら途切れ途切れに話をした。けれど、嫌な沈黙ではなくて、それが不思議だった。

それに対して雨はまた降り始め、その雨の強さに止むを得ず、途中のコンビニでビ

ニール傘を二本買った。

エブリーマートは僕達の生活圏でも数店舗ほど見かけるスーパーだ。入り口の自動ドアを潜ると、気の抜けたカラオケ音源のような店内BGMが聞こえてくる。

スーパーで女の子（彼女とは言わない）と二人で夕飯の買い物と言うと、「何が食べたい？」という会話が連想される。だけど、僕はその会話をとうにすませてきた。そうだ、これでお約束はあり得ない。

カートを押す沖野の隣で、浮き足立たないようにしようという思考がすでに浮き足立っている僕がいた。周りからどう見られてるんだろうか、もしかしたら知り合いにこの現場を見られるんじゃないか……とつらつら考える。これは本来、彼女側が考えることなんじゃないのか。

「そうだよ、ミハル。お菓子とかも買つとこうよ。楽しいよ」

そんな内心を知ってか知らずか、沖野はわくどきと目を輝かせている。

「僕はそんなに食べないけど」

「違うの、こういうのは買つてるときが楽しいんだよミハル」

確かに楽しそうとしか言いようがない様子で沖野はお菓子の棚を物色していく。ポテトチップスだったりクッキーだったりジュースだったりをそんなに必要？　と問いたくなるほどにカゴに放り込む。レジに向かう頃には、お菓子をかうついでに夕飯の材

料も買いました、といった風情だった。

そして計算もせずに放り込み続けたせいでお支払いは沖野が「うわ」と口に出してしまふくらいになっていて、見兼ねて僕がお菓子代を援助した。

「ありがとうミハル。大好きだよ」なるリップサービスを頂戴して、それが概ね棒読みであつたことを差し引いても、満足してしまつてゐる僕がいた。最初の警戒心は何処へやら。これを吊り橋効果もといストックホルム症候群と呼んでいいのなら、それだけが救いだつた。

予告どおり僕が荷物を持ち、身軽な沖野はどこかはしゃいでいる。

スーパーを出ると、まだ雨は降つていた。行きに買つてきたビニール傘を使おうと傘立てを見たけれど。

「ねえ、ミハル。傘が無いよ」

「盗られたか。二本とも?」

「ううん、ボクのだけ。ミハルのはあるみたい。傘無いと困るなあ」

沖野の傘が盗られていた。少しむっとした表情をしている。僕は沖野に漠然と抱いていた薄幸というイメージが急速に浮上するのを感じた。

「でも悪いことだけじゃない、よね。相合傘しようよ。相合傘しかないよ。ボク、傘盗られて落ち込んだじゃつた。ミハルに慰めて欲しいなあ」

振り向いて、沖野はそんな提案をする。その目ははぐらかすのを許さない。まあ、僕だけ傘差すわけにもいかないな。

「もう勝手にしてくれ……そつちから言ってくれて助かったよ」

「やったあ」

沖野と相合傘をして帰る。左手に傘、右手にお菓子その他を僕が持つて、その左側に沖野がいる。

「手え痛くない？ ビニール袋つて持つてると指に食い込むでしょ」

「家までそんなに距離はないし、なんとかなるよ。2リットルのジュースは重いけど」

庇いきれない体の右側が雨に濡れる。沖野は左側か。気にしてちらつと沖野を見る。相合傘に慣れてないと、お互い遠慮して本来なら濡れなかった場所まで濡れるようなことがある。

「ミハル？ もつとこつち寄れるよ。遠慮してるんじゃない？ 大丈夫だよ、怖がらないで、おいで？」

冗談めかして、沖野。

「ああ、うん。寄る寄る」

寄らずにそのまま歩き続ける。それが沖野にバレないはずがなかった。

「恥ずかしいのかな。ミハルから来ないなら、ボクから行くだけだよ。寄られるのなら

「いいの?」

そう言つて、傘を差している僕の左腕にぐいぐいと体を寄せてくる。左手を自分側に引けば一瞬は逃れられても、その後で沖野との密着度が上がつてしまふだろう。僕にはどうしようもなかった。

押し付けられて、名状し難い柔らかさが腕を通して伝わってくる。それだけでなく、雨で強まったシャランプーのにおいが鼻をくすぐる。近づけば、沖野のほうが背が小さいんだからそれも当然と言えた。

「……さつきまでずっとじやないけど話してたのに、ボクが寄つてから静かになつたね。嫌だつた? それとも……あつ」

これは良い獲物を見つけた、という顔だ。僕の表情から何かを読み取つたんだろう。だけど、それが計画的なものにせよ突発的なものにせよ、僕にできることは限られてい

る。
「察したんなら、言わないでくれ」

「ああ、うん。いいいいいよ、気にしない気にしない」

からかうような笑みが向けられる。そして、分かつていてなお離れようとしな

だけども僕はそれどころじゃなくて、これは良いことなんだから帰り道を短く感じそうなもの、実際は帰り道を途方もなく長く感じ——それでいて家に着いたと

きには、自分がどうやって家まで帰ってきたのかさっぱり覚えていないのだった。

エプロンを付けた沖野はキッチンでできばきと調理を進めている。はずだ。僕は料理ができないために手伝えることがなく、リビングでテレビを観ていた。包丁で切る、トントンという音が聞こえる。

とは言え、エプロン姿の沖野は見れたので構わない。駄目だ、さっきの相合傘が尾を引いてる。

女の子の手料理。それは例え、同じ材料同じ手順で女の子以外の何者かが作ったところで到底再現できないものだ。その子が作ってくれたという事実が特別なのだ。

沖野は僕のことを特別でないと言った。でも僕は、その沖野が作ってくれる手料理を特別と思う。いやだから何だ。相合傘に当てられ過ぎだ。

この時間のテレビは比較的どうでもいいニュースから、完全にどうでもいいニュースまでが流れる。七時くらいにならないと、観るものがない。

相合傘に影響を受けた思考に時間を割いたおかげで、沖野はもう調理を終えていた。エプロンは脱いでいる。

初めてこの部屋に来たときと同じく沖野はテーブルの窓側に、僕はその反対側に座る。テーブルの上にはオムライスが二皿。ふわふわしている。僕のほうが一回り大きい。

沖野の右手にはナイフ。それを僕のオムライスの中央線に走らせると、とろとろの卵が溢れる。家のオムライスで、なかなかこう上手くはできないだろう。普段からの自炊の賜物だ。それもメニューは僕が指定したことを考慮すると、一点集中の対策結果であるはずがない。

同じように沖野のオムライスにもナイフを入れれば、やはりとろとろと卵が溢れる。偶然じゃない。沖野が作るオムライスは、いつもこうなのだ。

「すごいな」

僕は褒める。褒めたくなった。

沖野は卵の残滓の付いたナイフを上向けながら、ふわりと笑う。

「でしょう。これがボクのオムライス。味も保証付きだよ、見た目を裏切らなくね」

「そうか、じゃあ食べてみよう」

「焦らないの。まだだよ」

机の上に載つかついていたケチャップを沖野が手に取る。その先は知れていた。

「書くのか？ 文字を」

「そうだよ。そうしたらほんとの完成」

キetchupを開けて、両手でケチャップの容器を包みこむ。力を込めて、込めて……ケチャップが勢いよく噴出した。事故現場はオムライスの上。

「あー……」

褒めたのがいけなかったか、ケチャップについてもいつものか。沖野のオムライスは無慈悲なケチャップに無残に塗りつぶされている。

不器用か器用かよく分からないやつだ。同じ料理の分野なのに。ともあれ、僕はフオローする。

「よくなるよくなる。まあ、何、食べば一緒だろ」

「一緒じゃないよ……もう」

僕のオムライスには普通にケチャップをかけ、その後二人で食べた。卵だけでなく、チキンライスの鶏肉も美味かった。見た目に相応しい味だった。

洗い物も沖野が買って出たので、僕は食器を運ぶにとどまった。またの暇をぼーっと過ごす。

沖野が戻って、二人でバラエティ番組を観るともなく観て、気づけば風呂の時間になる。もちろん家主に先を譲った。

沖野が風呂に行つたが、暫くシャワーの音は聞こえない。湯船に浸かっているのだろう。シャワーのときより当然時間がかかるのは覚悟しておいたほうがいい。という考え方するのは、沖野に早く帰ってきて欲しいみたいだ、なんて。

ほとんど点いているだけのテレビから目を離して、部屋の中を見回す。本棚に差さつ

ている文庫本の背に書いてあるタイトルと著者名は覚えがない。僕は本をあまり読まない。

することが何も無くなった。

放っておけば時間は過ぎるもので、今日何度目かの濡れ髪の沖野が目の前にいる。ほかほかと、湯気が見えるよう。

「次どうぞ、ミハル。お風呂はため直してるから。もうちよつと」

この間に僕はさつき買っておいたパジャマ代わりの新品の服の値札を処理する。処理しながら、することならあつたんじやないかと思う。

風呂はたまり、着替えを抱えバスルームへ行く。心理的抵抗感が無いとは言えないけど、まさか風呂に入らないわけにもいかない。

「シャンプーとかは自由に使ってね。ミハルの家だと思って、ミハルの家のお風呂だと思って寛ぐといいよ」

「うん」

寛げるか。薄笑いに見えたのは僕視点の補正なんだろうか。

脱衣所のカゴに着ていた服を放り込んだら、浴室に入った。濛々と湯気が立ち込めて、床はまだ乾ききっていない。嫌でもさつきまで沖野が入っていたんだと思わされる。

置いてあるシャンプーやコンディショナー、トリートメントも家のとは全然違う。お高そうなものばかり。

ためてもらったからには、浴槽に入らないといけない。なかなか勇氣がいるような、いらぬような、そういうことを考えるのはちよつとどうかと思うと言うか、何と言うか。

浸かる。肩まで浸かる。浸かると色々あつた疲れもあつて、気持ちが悪かつた。けれど、それとは別に落ち着かなさもあつて、早々に僕は湯船を出て体を洗うことにした。風呂を出て髪を乾かし、自分の家でお手本のように寛いでいた沖野と顔を突き合わせる。頬の桜色は引いていた。

しかし、あれだ。自分の髪から沖野と同じにおいがする。厳密には同じではないのだろうけど、だいたい同じのにおいが。そりや同じシャンプー使ってるんだから、と内心セルフツツコミを入れる。

そんな取り留めのないことを考えていると、沖野に声をかけられる。

「そうだ、ミハル。明日のことなんだけど、デートしよう、デート!」

デート! と繰り返す。

「デートお? どこか出かけるのか、二人で外に。遊びに」

女の子が女の子と遊びに行くときにデートと呼ぶのはある気がする。けど、それが彼

氏彼女でない男女の場合はデート、でいいのか？

「そうだね、二人で遊ぶんだよ。買い物したり美味しいもの食べたりして、一日の終わりに、今日は楽しかったねって言えるような土曜日にするの」

すでに楽しそうに沖野は言う。

僕は気づいている。僕が約束したのは、今日泊まることだけ。今言ったことは沖野の中でだけ決まっている予定に過ぎない。付き合う必要はない。

だったら、返事は決まっている。

「分かったよ」

別に誘いを断る理由もない。わざわざ逃げることもない。もうなんだかその辺りの判断が滅茶苦茶になってきている気もするが、考えるのは面倒くさい。楽しいならそれでいいんじゃないか。

「じゃあ明日は、ミハルは一旦家に帰って、用意をしたら待ち合わせね。待ち合わせ場所はボクの家。どこ行こうね、楽しみだね」

これは、明日の予定を考えておいたほうが良さそうだ。

それからまた暫くすれば寝る時間。

沖野は僕に予備で新品の歯ブラシとコップをくれた。歯を磨いた後は、それらがこの家の洗面所に普段から置かれることとなった。

部屋に戻ってきて、沖野は自分のベッドの中に潜り込み、僕は床のラグの上で寝ることにする。

と、沖野が潜っている布団の中からぽいぽいと何かは吐き出された。見れば、沖野が今着ているはずのTシャツと黒のハーフパンツ、そして——ブラ僕は何も見えない。

「電気消すよ、おやすみミハル……ってどうしたのその顔？」

絶句している僕を横目に、沖野が電気を消そうとしていた。胸の高さまで布団を抱きながら。何故そんなことをする必要があるのでろう寒いんだらうか僕には分からない。何故だろう。

「お、おやすみ」

努めて普段どおりの声音で言った。

深夜。僕がベッドのほうに足を向けてラグに寝転がっていると。足を強かに蹴られた。

「痛え」

足を蹴った張本人の沖野がいるほうを非難の目で見る。沖野は「あ、」と声を洩らした。

「そっか、いたんだ」

寝惚け眼を擦りながら、眠そうな声で沖野はそう感想を述べた。

「酷え」

「ごめんミハル」

トイレに起きたのだろう沖野はそのまま歩いていく。応える声にはささやかに嬉しそうな響きがあつた。

不思議の城

「……きて、起きてよミハル」

声がある。目覚ましで一気に起こされるのとは違い、僕は緩やかに目を覚ます。

まぶたを開けて、目が光に慣れてきたら沖野の顔の輪郭がはつきりした。僕を起こしたのは沖野だったみたいだ。

沖野はどうやって起きたんだろう。

「起きた？ まだ頭が起きてないね。顔がぼんやりしてる。ミハルは朝は弱いのかな」

「まあ、普通かな。そう言う早希ちゃんは早起きなんだな。目覚ましの音はしなかったと思うけど」

僕が深く寝過ぎてたのでなければ。

「いつもってわけじゃないよ。今日はデートだから、早く起きたんだよ？」

「ああ……それは。なら僕だけいつまでも寝ぼけてられないな」

言葉どおり、デートではないにしても。沖野は昨日の約束をこうして果たそうとしている。それなら僕だって、それに報いるくらいはする。

「うん。じゃあ、ミハル。ミハルは朝ご飯食べる？ パンでいいなら一緒に作るよ。」

作ってから食べないって言われたら困るから、ミハルが起きるまで待つてたんだよ」

「僕も食べるよ。待たせてごめん。それじゃ、よろしく」

沖野が作ってくれた朝飯は、トーストとイチゴジャム。小エビのサラダと飲み物はグレープフルーツジュース。手がこんでいるように思う。

机を挟んで、向かい合って食べる。

「ミハルつてさ、昨日親に泊まるとか連絡した？ もし忘れてたなら、今訊いてもどうにもならないんだけどね」

「そのことなら、うちは放任なんだよ。どうせ連絡してもご飯作るのが一人分減るくらいだし。連絡しなくても何となく対応するだろうし」

「そうなんだね。その辺りは家によつて違うもんね」

フォークでサラダを突き刺しながら沖野は話している。そして食べられる。

「うちの親なんて、家にいるのが嫌いなくらいなんだと。そのおかげで僕も放任されてるんだけど」

「お母さん？」

「そう。うちは変わつてるかもな」

トーストを齧る。対して沖野はそこで食べる手を止めて、僕を見据える。

「それって、家じゃなくてミハルのことが嫌いなんじゃないの」

僕に父親がいなことにこれまでの雑談の折に触れていたからこそその一言だった。けど酷い。

でも沖野に悪気があるわけじゃない。思ったことを言ってしまっただけ。まあ配慮はないかもしれない。

グレープフルーツの苦味を口内に感じながら、僕は返す。

「どうなんだろう。聞いたことないから実際は知らないけど、でもそれを言うのは酷いな」

「ごめん。ボクの悪い癖だね」

「謝らないでくれ。僕はまだ嫌われてると決まったわけじゃないし、早希ちゃんに怒ってもないから」

努めて朗らかに言えば、それは沖野にも伝わったようでその後もあれこれ話しながら朝食を終えた。

「じゃ、また後で」

「うん、行ってらっしゃい」

僕は沖野に見送られ、一度自宅に帰る。僕の着替えと、沖野が一度別れてから待ち合わせしたいって希望したからだ。

一人だと二人よりも移動にかかる時間が少ない。家に着いて、適当な服に着替え諸々

の用意をしたらすぐにまた家を出る。

「そう言えば、待ち合わせの時間決めてなかったな……」

家を出たところで気付いた。一瞬考えて、早く着き過ぎたなら外で待てばいいだろうと結論付けてまた歩きだす。

やはり一人だと体感時間は長くても実際移動にかかる時間は短く、僕はもう沖野のマンションに着いていた。待ち合わせ時間を決めてなかった僕達だけど、エントランスの暗証番号は聞いていたので中に入れた。

エレベーターに乗ったら沖野の部屋の前に行き、ドアをノックする。声かけはしなくても、ドアスコープから僕が見えるだろう。

すぐにドアが開けられる。そのまま普通に部屋に上がろうとした僕だったが、少し目と意識を奪われることがあった。

「おかえりミハル。さあ、入って」

にこりと笑う沖野にでなく。その着ている服だ。

水色の、フレアスカートと半袖ワンピースに白いエプロンを付けたエプロンドレス。白と黒のストライプのニーソックス。頭には小さくて黒いリボンカチューシャまで付けていた。

僕がそのまま玄関で惚けていると、沖野のほうから声をかけてくれる。

「この服が気になる？ 今日はまだ雨で、おうちデートだから外では着れない服着てみたの。似合ってる？」

片手でスカートの端をつまんで、自分でも珍しそうに視線を落としている。そして僕の様子を窺う。

「似合ってるよ。ただびっくりしただけで。そういう服も着るんだって」

似合っていないなら無責任なことは言えないけれど、そういうこともなく。自分の家でも、余計に何を着るかは自由だ。

「普段は着ないよ。着てもハロウィンとかくらいかな。そんな服だから、試しに着たかったんだ」

そんな不測の事態がありながらも、いつまでも玄関に立っているわけにもいかないの
で、僕は部屋に上がった。沖野の靴しか無かった玄関に、僕の靴が並んだ。

ほとんど定位置になった机のそばに腰を落ち着ける。この部屋に馴染んでるんだか
浮いてるんだかよく分からない、不思議な格好の沖野を見るともなく見ながら。

「まず何する？ そうそう、一応持ってきてみてって言ったゲームは？」
「持ってきてるよ。ほら、ソフトはある中から適当に持ってきたけれど」

沖野から携帯ゲーム機を持ってくるように言われていた。デートに……沖野が言う
デートには、ゲームがいるのかって半信半疑だったけど。デートでゲームが絡むとする

なら、パーティゲームかゲーセンだと思っただけだな。

沖野はパッケージを手に取りためつすがめつしてから、顔をあげる。黒髪がさらりと零れる。

「これしよう。ボク横で見てるからミハルがやって」

はい、と手渡される。手渡されたものの、疑問符は増えるばかりだ。

「僕がするんだな。でも見てるだけで楽しいかな……人によるのか」

「そうそう、楽しみ方は一つじゃないよ」

言われたようにゲームを始める。横から沖野が画面を覗き込む。ゲームが小さいから、覗き込むには近くに寄らないと駄目だ。肩が触れたり、沖野の髪がくすぐったかったりしてゲームに集中するには向いてない状況だった。

「おー」とか「あつ」とか「綺麗だね」とか言ったり笑ったり、沖野は沖野で楽しんでるようなので良かった。僕もときどき説明したりツツコミを入れたり、集中を乱してるのか気を紛らわせてるのかどっちか分からないことをする。

沖野もやってみたいと言い、交代する。覗き込む側から距離を詰めないといけないから、気恥ずかしい。沖野が見ていたときよりもちよつとだけ距離が空いている。

たどたどしい操作ながらも飲み込みは早く、沖野は思うように遊んでいる。その体がかときどきゲームに釣られて動く。すると、少し空いた距離を越えてまた肩が触れた。

こんなふわふわした過ごし方でも時間は勝手に過ぎてお昼時。ピザを注文することにした。僕が電話をかける。

まだゲームで遊んでる沖野の背中を見ながら、沖野の分も注文を終えたらピザが届くのを待つだけだ。

「ああああ……」

沖野が死んだ。でも少ししたら沖野はまたリトライするみたいだ。

届いたピザを食べて正午を過ぎ、食べている間に決めたので映画を観ることにする。昨日より前に沖野が借りてきたものらしい。

テレビの正面にあるソファに座る。すぐ右に沖野が座っていて、ゲームのときとそんなに距離感が変わっていない。

ポップコーンはないけど、ここで昨日に買っておいたお菓子とジュースが役に立った。その場限りの楽しみじゃなかったってことだ。お菓子とジュースが食べ物と飲み物で良かった。買って満足して終わらないから。

こういうときでもない、恋愛ものの映画なんて観なかっただろう。でも観るとなったらしつかりと観る。

最初のほうは静かに観ていたが、あるときに沖野が「これ、あんまり面白くないね」と言っ、その言葉どおりだれ始めた。僕も同意だった。

恋愛ものと言えば、最低のラインとしてキスがあるわけだけど、その場面になったとき僕は、親と同じ部屋でテレビを見ていたときにそういつたシーンが流れたときのような気まずさを感じた。いやそれ以上だ。恥ずかしさまで付いてくるから手に負えない。沖野をそれとなく見てみたけれど、普通だった。身じろぎ一つしない。

沖野から視線を画面に戻し、うわの空になる。女子はこういつた展開に耐性があるんだろうか。だとしたら、またしても僕はつかりが落ち着きをなくしていて決まりが悪い。

映画は観ているだけでどんどん勝手に話が進んでいくからいい。沖野は寝ていた。右か左かの二択で、僕のほうに寄りかかってくる。すうすうと寝息が聞こえる。僕は電車の中で疲れた隣人が寄りかかってくるシチュエーションを想像した。その想像には不似合いな沖野の服装だけだ。

けれど、可愛い寝顔はあまねく嘘寝と聞いた記憶がある。なら寝息はどうなるんだろう。これも、沖野は可愛いを偽っているのか。だとしたら、どうして？ そもそも沖野のことを可愛いと思ってしまうことが問題じゃないだろうか。考えるほど深みに嵌っていく。

気もそぞろに、無心で映画を観終えて沖野を起こす。伏せたまつげが長くて、一切の警戒心がない、でも綺麗な寝顔だった。

くあ、と欠伸を漏らしながら沖野は伸びをする。眠気を振り払ったら、僕を見て言う。「……ごめんね、寝ちやつてた。ミハルにもたれてたし。重くなかった?」

「全然、おっさんがもたれてくるのに比べたら」

「? なんでおっさん?」

沖野が借りてきた映画は他にもあつて、それはホラーみたいだったけれど断つた。ホラーでも沖野はつまらないと寝そうな気がする。

二人でそれぞれ好きな本を読むことにした。僕は沖野の漫画を借りて読んで、沖野は小説を読んでる。さっきの映画では、つまらないと思うものが被っていたから、好きなものの面白く思うものも被るんじゃないかと期待を込めて。そうでなくても、たまには自分の好きなジャンルから出てみるのも良いものだ。

僕はそのままソファで、沖野はラグに寝転がり本を掲げて読んでる。長い髪がラグに広がっている。すごくラフだ。

読書に集中してしまっていた。時計の針が割と進んでいた。

「夜、何食べようか?」 雨もあがつてそうだし、どつか食べに行く?」

「それもいいね。今日は一日、家の中だったから。近くのファミレスとか」

沖野が何をどこで食べるか思索しながらそう言った。近くなら雨の心配もあまりしなくていい。

「だけど外に出るならボクは着替えないとね。こんな格好で外には出られないし」
困ったような顔で笑う。

「可愛いからそのままで大丈夫だと思っけど」

可愛い、と言ってしまっしてから本心が口をついて出たことに気付いたけど、言い直すことはしない。

沖野は驚いたみたいに目を大きくして、嬉しそうな、戸惑ったような、困ったような笑顔を浮かべる。

「でも痛いよ。誤解されちゃう」

「似合ってるのに、文句つけるやつは放っておけばいいよ」

「そんなこと言っっても……着てるのはボクなんだよ？ 分かってる？」

このまま外に出たことで良くないことがあるとしたら、それは沖野に降りかかるんだってことを言ってるんだろう。それは確かにそうだ。

「そんな駄目かな、そういうもんかな……納得いかないな」

沖野でも、そういう類の人目は気にするのか。気にしないといけないのか。

ため息みたいな言葉が零れた。

その後の一瞬の間があつて、その間に沖野は何かを考え、答えを出したようだった。

「ミハルこそ、やけに拘るんだね？ 何か理由なんかがあるのかな……ほんとは着てた

くないんだけどなあ」

「そこまで言わせちゃったんだし、と沖野は僕の思う沖野らしく、しぶしぶ了承してくれた。

自分自身、何をそこまで拘っているんだって疑問だけど、ほんの短い期間で僕が見てきた沖野は、いつだって自由だったから、だからその沖野までもが縛られる人目を嫌だと思つたのだ。沖野なら、と僕は期待した。期待を押し付けて、期待どおりの反応を返してもらつた。それは僕のエゴで、今僕がしていることは、自由じゃなくて自分勝手と呼ぶものだ。

「でも、エプロンとカチューシャは取るからね。そこは譲れない最低ラインだよ。このワンピースだけでも、相当無理してるんだからね」

気持ち頬を膨らませて、沖野が抗議してくる。当然だ。分かり切つていたことなので僕は謝る。

「困らせてごめん。何て言うんだろう……ごめん、早希ちゃん」

「べつに。こういうのも、後で思い出したら楽しい思い出になつてるかもしれないしね。たまにはミハルに振り回されてあげるよ。その代わり、食べに行く時間は遅めね」

どんなときでもあくまで前向きな沖野を、僕は眩しく見ていた。

そこからまた読書に戻つて時間を潰し、空腹をお菓子で紛らわせながらこの格好の沖

野と外に出やすい時間帯になるまで待った。

玄関で、沖野はその服に合ったヒールじゃなくて、黒のスニーカーを選んで履いた。

マンションを出たら、左に曲がって道なりにファミレスに向かう。沖野の変わった服は、意外と夜道に合っていた。

ファミレスとコンビニは夜でも明るい。入り口のドアを開けると、チャイムが鳴った。

ちょうどレジから会計を終えた、二十代の男三人組が僕達の横を通り過ぎる。ある程度予想はしていたことだったけど、三人組は口々に好きなことを言い残していく。

「おい見たか、今の子可愛い」

「なんだお前、ああいうのが趣味だったんかよ可愛いけど」

「彼氏の趣味か？」 可哀想に、大変だな」

「なー、彼女いないお前には分からないよな」

「うるせえな」

残された僕達は困ったものだ。沖野なんて、顔を赤くして下を向いてスカートを握りしめてる。せめてもの救いは、彼氏発言で僕にも火の粉が降りかかったことだ。それから同時に沖野にダメージを与えてしまっているけれど。何だ、誰も救われてないじゃないか。

席に案内してもらい、向かい合って腰かける。僕はハンバーグプレートで、沖野はステーキプレートを頼んだ。

「もう夜も遅いけど、そんなの気にしないで肉食べるんだな、早希ちゃんは」

「ボク太らないから。それに肉好きだし、食べたいもの食べないと」

二人とも注文したものが運ばれてきたら会話をしながら食べ始める。

その中で、今日のことを尋ねる。

「あのさ、今日のこれ、デートだけど……こんなんでも良かった？」

沖野相手だから、今日1日のこんなん呼ばわりも遠慮はしない。沖野はふっと笑って、当たり前前みたいに言う。

「一緒にいければ、それだけで楽しいよ」

それだけ言ったら、沖野は食べることに集中し始めた。なので僕もハンバーグを食べながら、一緒に沖野の言葉の意味も咀嚼する。

食べ終わった。けれど食べ終わったのはハンバーグとステーキだけなので僕は聞いてみる。

「何かデザートは？」

「食べないよ」

「食べないんだ」

「食べたらずるから食べない」

「……食べても太らないってさっき言ってたのにか？」

思わず指摘した。言うことがころころ変わるのは誰にとっても珍しいことじゃないけどな。

「それは普通に食べたらね。余計に食べたらずるに決まってる」

「そりゃそうだ。余計に食べないなら太ることもないだろうな」

沖野の家に帰ってきた。風呂の待ち時間にも、自分が風呂に入ることにも慣れてきて、自分の家ほどじゃないにしても十分寛げるようになっていた。

でも、あれ？ 僕は何で今日も沖野の家に泊まっているんだ？

忘れていた疑問が首をもたげる。けれど、すぐにそれより重たい眠気が疑問を打ち消した。家でいても、ずっと何かをしていたら疲れはする。

沖野も欠伸をする。見ていたらその欠伸が僕にもうつった。

このまま寝てしまおうだ。まあ、それでもいいか。明日の朝も、早くに起こされそうだしな。

音が遠く、意識が沈んでいく。

また明日、明日は外に遊びに出かけることになるのだろうか。そこまで考えて、僕は本格的に眠くなる。

平和だった。僕の考えは平和過ぎて、明日あんなことになるなんて——
考え
もしていなかった。

夏風邪は性質が悪い？

カーテンの隙間から差す日差しが強くて、僕は起きた。昨日もなし崩し的に沖野の家に泊まってしまった。

今日は沖野に起こされなかった。何気なく時計を見てみるともう9時を回っていて、早起きには程遠い。どおりで日差しが強いはずだ。昨日は早起きだった沖野だけど、2日続けては眠かったんだろうか。

ベッドのほうに沖野の気配がする。起こした場合と起こさなかった場合の予想を天秤にかけてから、立ち上がり沖野の様子を見る。

沖野はまだ横になっていた。だけど少し様子がおかしかった。髪が汗で額に張り付き、顔には疲労の色が見える。

「早希ちゃん？ 起きてるのか？ もう朝って呼んでいいか曖昧な時間だけど……」

「ああ、ミハル。おはよう、今日はボクなんだか体がだるくって、ベッドから起きれなかったんだ」

僕が声をかけると、沖野はすぐに目を開けた。寝起きじゃないから受け答えもしつかりしている。でも体がだるいって、それは。

「体温計はどこにある？」

沖野が答えた棚を探して体温計を見つける。そして、沖野に体温を計らせた。検温が終わったことを知らせる音が鳴ったら、僕は沖野から体温計を受け取った。

「やっぱり、熱がある。一昨日の雨に濡れたせいだろうな」

37.8度は微熱じゃない。体調の悪さは沖野自身が一番分かっているだろう。

「そっか、ボク風邪ひいちゃったんだね。今日のデートどうしよう」

「もちろん、無しだよ」

そう言ったら沖野は目に見えて落ち込んでいたけれど、だからと言って折れるわけにはいかない。それは優しさじゃないから。僕はいつになく意思を強く持った。

風邪と分かったからには出来る範囲でなんとかする。家にあつた冷えピタと氷枕を沖野に使う。

今できることはこれくらいだ。あと僕にできるとしたら買い物くらいか。

「何か食べたいものとか、風邪のときにもいつも食べてるものとかないか？ 僕が買ってくるよ」

聞くと沖野は風邪で重い頭で考えて、何かを思いついたみたいだ。

「アイスとか、かな。ご飯は食べられる気がしないよ。うん、アイス」

自分でも納得がいつているようなので、僕はその案を採用する。とりあえず何も食べ

ないよりは、何でも食べたほうがいいはずだ。

「じゃあ、今から買ってくるよ。何かあったら僕に電話して……そう言えば、連絡先交換してなかった」

家に泊まるくらいに沖野との距離が近過ぎたから、逆に必要なかったんだな。気にしてなかったけれど。

「そうだったね。それじゃあこんなどきだけど、交換しよつか」

マンションを出たら自転車に乗って、スーパーよりも距離の近いコンビニに向かつて漕ぎ出す。割高なのを気にしなければ、品揃えに不備はない。

別に沖野が待っているわけでも、待たせているわけでもないけど、知らずペダルを漕ぐ足がいつもより速くなっていた。

買うのはアイスと風邪薬とポカリと。アイスはあつさり目から濃い目の味のものまで全部。のど飴や栄養ドリンクがあつてもいいかもしれない。それに、食べやすさで言うならヨーグルトも良い。

ご飯は食べられないとは言ってたけど、気が変わることもあるだろう。煮込みうどんと、僕の方も兼ねておにぎりを買う。

カゴの中がいっぱいになる。もしかしたら僕は買い物下手かもしれない。沖野のことを悪くは言えない。

でも、自分に迷惑をかける分には自由だ。会計は僕持ちなんだから。袋を幾つも提げて、沖野の家に帰る。

「おかえり、ミハル。またいっぱい買ってきたんだね？ 何買ったの？」
「頼まれたものと頼まれてないもの」

バナライスを僕と沖野の分、一つずつ取ったら後は冷蔵庫に入れる。帰り道を経て、溶けかけだ。

「おいしい……ミハルのおかげで助かつちやった。一人で風邪引いてたら、外に買い物なんて行けないもんね」

額には冷えピタを貼って、顔には具合の悪さが見えるけれど、それでも十分活き活きとした笑顔を沖野は浮かべる。これなら僕の財布も浮かばれるというものだ。

沖野がアイスを食べ終わった頃を見計らって僕は沖野に聞く。

「軽く食べられるものも買ってきたんだ。さつきはああ言ってたけど、やっぱり何か食べたくなくてないかな」

「すごいねミハル。ボクのこと見透かしてるみたい。そうなの、今はお腹空いてて」

「うどんとおにぎりとヨーグルトがあるけど、どれにする」

「そうだなあ、うどんにする」

ちよつと早めの昼ご飯を食べたら沖野に買ってきた風邪薬を飲ませる。

その後は、そこまでひどくはないけど咳もあるので沖野は買ってきたのだと飴を早速口に含んでいた。けど沖野は飴を食べてる最中でさえ、気を遣って何か話そうとする。

人心地ついて、僕は立ち上がる。

「そろそろ僕は帰るよ。僕と一緒にいたら早希ちゃんを遣うだろ？ 色々買っておいたのは冷蔵庫に入れてあるから」

「待って！ 気を遣うなんて、全然そんなことないよ……ミハルがボクに気を遣うことはあると思うけど」

焦ったように布団から起き出そうするのでそれを抑えて、その場に留まる。

沖野は下を向き気味で、見れば手は布団を強く握りしめていた。

「……」昨日も昨日もミハルがいて、でもボクが風邪を引いたときにまた一人に戻ったからそれはちよっと寂しいかな」

沖野が僕を見る。そんなに寂しそうに笑われたら、いないわけにはいかないだろう。逃がした食べかけの飴で少し膨れてる頬にも免じて。

「じゃあいるよ。治るまでさ」

そう言ったら返ってきた笑顔は、僕にはできないような心の底から安心したような、そんな笑顔だった。

でも僕が残る代わりに、無理して何か話したりせずに横になつて休むように約束させ

た。僕は何様だろう。

沖野が静かになれば、時間はゆつくりと流れていく。僕は特に考えることもなく風邪のことを考えていた。

風邪はひくと学校を休める。これは運が良い。でも今日は日曜だ。休みの日に風邪をひいて、休みが潰れるだけで休みが増えないなんて、なんて運が悪い。沖野は不幸体質なんだろうか。

風邪薬が効いてきたのか寝息をたてる沖野のほうをぼんやりと眺める。

でも、例えば今日みたいに。僕がいるだけでも何か変わることはあるだろうか。

退屈でできた深淵が僕を覗いていた。

沖野が目を覚ます頃には夜だった。食欲はあるらしいので、おざなりだけど昼に買っておいたおにぎりを二人で食べた。顔色も良くなっていた。

だから約束を少し緩めて、僕はそれから沖野が起きているのを止めなかった。

「ボクはシャワー浴びてくるね、ミハル」

「……まあ、いいけどさ。僕も風邪引いたとき風呂入るし」

沖野を見送ったら、初日とはまた違った焦燥感に襲われた。やましきなんて吹き飛んで、バスルームからの音に耳をすませる。

しばらくして沖野は無事に帰ってきたけれど、待っていた僕は無事ではすまなかつ

た。今日一番の気疲れだ。

今日は早く寝る約束もしていた。沖野の次にシャワーをすませたら、すぐに寝る体勢になる。

おやすみを言って、僕が電気を消す。電気を消したら、僕は横にはならず机の上で腕を枕にする。

気にしたつてしようがない。でも、気にせずにはいられない。だから僕は、せめて沖野が僕を起こすときがあるとすればすぐに起きられるように、机に体を預けて浅く眠った。

何かの鳥の鳴き声がある。たぶん朝だ。僕は目をつむつたままそう思った。

でもまだ早い時間だ。念のために目覚ましはセットしてあるから、それまで寝ていよう。

布団が捲られる音がした。僕以外の心配がある。だったら沖野だろう。

沖野が近づいてくる。

「昨日はありがとう」

耳元で声があった。その声は、僕がまだ寝ているかと思つてからかいつもよりももっと素直で、なんだか目が覚めてきてしまった。

それきり沖野は離れていって、時間になるまで僕を寝かせておいてくれるつもりなの

かもしれない。

もう眠くはないんだけど。今すぐにも起きたいくらいなんだけど。それでも一度始まったら終わるまで、僕の寝たふりは続く。

燃える日

セツトしておいた目覚ましよりも少し早く、沖野に起こされる。本当は沖野が起きたときにはもう起きていて、それからずっと寝たふりだったんだけど。

うるさい目覚ましより、沖野に起こされるほうがずっといい。

今日は月曜で学校がある。それは僕や沖野がどんな毎日を過ごしていても関係がない。

でもとりあえず、沖野の風邪は治ったらしいから良かった。

朝の用意をしているときに、沖野が昨日色々買ったお金のことを気にして聞いてきたけれど、僕は返してもらおうのを断った。だって勝手に必要ないようなものまで買ってき、それでそのお金を請求するなんて、押し売りだろう。

風邪が治ったのならそれでいい。僕は沖野が楽しめることに先行投資したんだから。なんて、考えが覚束ないのはまた僕が浮かれているからなのかもしれない。

僕はもう沖野の家を出て、学校へ向かって歩いている。

僕がいつも登校するより少し遅い時間、距離が短くなつた通学路、隣を歩く沖野。何もかもがいつもと違う。

何でもないことを話しているだけでこうも浮ついてしまうのは、僕にその原因があるんだらうな。

歩いていけばいずれ目的地には着くもので、学校までの道のりは呆気なく終わりを迎えた。

今日も、私立青夏高校（しりつせいかこう）と刻まれた正門をくぐり抜けて、特に思い入れがあるわけでもないその敷地内に足を踏み入れる。

学校が近づいても沖野は特に僕から距離を取るでもなく、一緒に登校してきたと思われても何でもないみたいだ。僕も沖野を習って平然を装う。その内心は定かじやない。

そんな僕達の横を自転車通学の他生徒が追い抜いていく。別に振り向いてきたりはない。当然だ。

下駄箱を過ぎて、階段を登り二階の教室前まで来た。僕は1組なので、1組の教室の前扉のところまで立ち止まる。

立ち止まったはいいけれど、ここで沖野にかけるべき適切な言葉に迷った。声をかけないのは違う気がする。

「またね、ミハル」

「ああ、またな……早希ちゃん」

またね、か。

沖野は踵を返して歩き出す。僕はそれを見送った。沖野は3組の教室に入るらしい。沖野は3組だったのか。

扉に手をかけて、そこでまだ自分を見ている僕に気づいて沖野はふわりと笑う。そして、そのまま教室に入っていた。

沖野が僕のことをミハルと呼ぶのは、他の誰かからするとただ名字で呼んでいるだけに聞こえるだろう。

じゃあ、僕は？

僕は沖野のことを早希ちゃんと呼んでいるわけだけど……そんな呼び方するの、高校に入ってから沖野以外にいないぞ。周りとしてはその呼び方は普通でも、僕としてはその呼び方は普通じゃない。

さっきの瞬間の躊躇いはそれだった。照れ臭さはなんとか押し殺したけど、意識してしまうと、どうにも。

気づけば教室にも入らずにずっと立ち止まっていたので、僕はようやく扉に手をかけるのだった。

沖野と接点ができたと言っても、その後の授業も、昼休みあるいは昼飯も何が変わるわけじゃない。

通常通り。いつもどおり、毎日は過ぎていく。だから変化があったら、それは放

課後だった。

放課後になって、沖野は来た。廊下で待つなんてことを沖野はしない。教室の中に入ってきて、僕の席まで寄ってくる。

「帰りも一緒に帰ろう?」

なんて言うし。

沖野に比べると駄目だけど、僕の自意識もそこまで酷くない。ここでその誘いを断るようなことはしない。

「そうだな、そうしよう」

そう言えば今日は、沖野の家に泊まるとかいう話は聞いてない。だから今日は、自分の家に帰れるのかもな。

でも家までは送っていいこう。どうせ帰り道の途中だ。一緒に帰るってそういうことだと思う。

沖野と初めて出会った通りに差し掛かった頃、沖野が不意に立ち止まった。顔をあげて何かを見ているので、僕も何を見てるのかとそっちを見る。

「……煙?」

特に何があつたわけでもないから煙を挙げてみただけだけど。沖野のマンションのほうだ。そっちのほうっていうだけで、それだけなんだけど。

でも、そうだ。自分の家のほうで煙が上がっていたら、少しは自分の家が燃えている可能性も頭に浮かぶ。浮かんで、すぐに消えていく。

暫く見ていれば、沖野も煙を気にするのをやめて歩き出した。僕もまた歩き出す。

家に帰れば、本当は燃えてなかったことも分かるんだしな。

「燃えてる」

沖野の家に近づくにつれ、僕達はその異変に気付いた。何か騒がしい。

マンションの周りには人だかりができていて、皆マンションを見上げていた。

「ボクの部屋も、」

沖野の部屋がある一帯が燃えていた。一瞬で火事だつて分かるくらいに。

一つ下の階は、沖野の部屋の真下の部屋だけが燃えている。あの部屋から延焼したんだらう。沖野は、何も悪くない。

すでに何台もの消防車が来て放水をしている。火を消し止めるための容赦ない放水が、沖野の部屋を目掛けて行われる。炎と放水で、沖野の部屋は滅茶苦茶なはずだった。

沖野は部屋を見上げたままで動かない。後ろ姿だけじゃ今、沖野がどんな顔をしているのか分からない。

放つておくことなんてできない。でも僕は、僕はなんて声をかければいいんだらう。なんて声をかけられるんだらう。

自分の家が燃えたとき、なんて声をかけてほしいものなんだろう。

……そんなの、自分の家が燃えたこともないのに分かるわけないだろ。分かったふりに意味なんてない。

でも、だからって。何も分からなくても。

じつとしてるわけにはいかないんだよ。

僕は沖野に近づいて行って、そしてその手を取った。断りも返事も何もなく、強い力で引つ張っていく。

振り返った沖野の目に涙はなかった、ように見えた。もしかしたら、どうしていいか分からないのは沖野も同じなのかもしれない。

泣くことも、どうすればいいのか分からないのかもしれない。

行き先は僕の家だ。僕が間違っていたら、この手を振り払ってほしい。

家に着くまで、僕はその手を離さなかったし、沖野も僕の手を離すことはなかった。

リビングの椅子に座らせて、沖野は今、水を入れたコップを両手で持つて飲んでる。「あのさ、早希ちゃん。これは余計な真似かもしれないんだけど」

沖野の目が僕を見る。

「今日はここに泊まっていいから。今日だけじゃない、明日も、明後日も。ずっとだっていいからさ……」

「ありがとう、ミハル」

僕にはこんなことしか言えないし、こんなことしかできない。

沖野はすぐく繊細に、僕を気遣うように、心のこもった礼を言った。本当に助かるという風に。

でも、まだだ。僕が言いたいの、僕に言えるのは、僕が言うべきなのは——
——こうじゃない。

そうは分かかっていても、答えは出ずにそれを言える機会は過ぎていく。よくある時間切れだ。

気持ち切り替えよう。

「こっちの部屋を使ってくれ。部屋だけは余ってるから、早希ちゃんが使ってくれればこの部屋も役に立てるよ」

「うん、使わせてもらおうね」

それ以上は会話もなく、この状況にふさわしいと思える会話に心当たりもなく、沖野は部屋に入っていく。

それから僕がすることは、いつ帰ってくるかも知れない親に電話をかけることだ。断りを入れておかないといけない。

数回の呼び出し音の後に、母親が電話にでる。僕は要件を伝える。

火事の飛び火で自分の家に住めなくなった同学年の沖野という女子を、いつまでかは決めてないが住まわせたいと。こう言ってみると無茶苦茶だ。突拍子もない。

「だけど、無茶苦茶なのは沖野だって同じだ。これくらいいいだろう？」

全てを伝え終えた。話を途中で遮らないで、最後までよく聞いてくれたと思う。普通の親ならこうはいかないんじゃないだろうか。

無茶苦茶なのは、僕に始まった話じゃないんだろう。僕なんて初めてするような頼みがこれだ。つくづく助かる。

一瞬の間を置いて、答えが返る。

僕はどちらにしても、沖野を何とかする覚悟を決めていた。

「いいんじゃない？ 奏がそこまでしてあげたいって思うんなら、それはその子……沖野ちゃんのこと好きとか、そういうことでしょ。ならしよがな。あんたが沖野ちゃんを助けなさい」

許可します、と言ってくれた。

奏は誰にでも優しくないしね、とか何とか言ってたような気もするけれど、正直聞いてなかった。許可を得たことさえも、それよりも大きい衝撃で印象が薄れていた。

——僕が沖野のことを好き？

そんなこと、僕がよく知らないんだけど、それはどういふことなんだ？

「それと。沖野ちゃん、服も何も残ってないだろうから、明日、服を買いに連れてってあげなさい。私がとりあえず外に出られるような服を適当に買っておくから」

「あ、ああうん」

気を取られていたら話が進んでいる。火事のことだつてそうだ、家が燃えたら、何もかもが燃えてることになるのか。僕も案外混乱している。

「さすが私の子だ。まだ頼りないけど、頼りにしてるぞ私の息子」

「……なんだよそれ、ありがとう」

次の日の朝、沖野の部屋のドアをノックする。すぐにドアが開かれて、沖野の姿が見える。目は、泣き腫らしていたりとかはしないみたいだ。泣き方が分からなかったんだろうか。

「起きてたんだな、早希ちゃん」

「うん、今日も学校だから。おはようミハル」

「おはよう。それなんだけど、今日は学校を休まないか？」

「え？」

沖野の目が驚きに見開かれる。そんなに驚くことなのか。昨日の今日で、沖野が学校を休んだって誰も責めはしないのにな。

「だって早希ちゃん、服とかどうするんだ？ 無いと困ると思うけど」

「あ……そうかも」

「それにさ、もつと大事なことがある」

昨日言えなかつたことがある。

「そうなの？ ……聞くよ、その大事なこと」

沖野が聞く体勢というやつになる。真剣さと、不安が混じつたような表情を沖野は浮かべている。きつと、沖野が住むことを親に反対されたとか、そういうことを言われると思つているんだろう。

その心配は、杞憂だ。

僕がこれから言うのは、もしかしたら今言うべきじゃないかもしれないことなんだから。

「早希ちゃん——僕と一緒に、ここで暮らしてくれないかな」

それはいつかの沖野への答えで。

昨日の僕が言えなかつた答えで。

まだ言えない、まだ確かだと自信を持ってない、沖野のことを好きつて気持ちに繋がる手がかりだった。

昨日と言つて同じようでも、伝わる気持ちはあるはずだ。

言つてしまったら後は待つことしかできない。沖野は僕がそれを言い終わった後も

ずっと僕を見ていて、そして目を伏せた。

そして、次に目を開いたら咲き誇るような笑顔になった。

「これから、ボクのことをよろしくお願いします。好きだよ、ミハル」

受け入れてもらえたみたいだ。ああ、良かった。僕は間違つてなかった。間違つてたなら、こんな笑顔はない。

僕は今日、学校を休んで新しい始まりの準備をする。何があつたとしても、何も終わりはしないから。

この騒がしい鼓動は、告白じみた何かのせいなのか、沖野が言った好きのせいなのか。それは分からない。

だけど僕が沖野に好きと伝えられる日もそう遠くはないだろうと、僕は心のどこかで思った。